

平成 24 年度

家庭と連携したメディアコントロールへの取り組み（報告書）

中野市立長丘小学校

1 第1回生活習慣に関する調査から

今年度当初、長丘小学校では子どもたちの生活実態調査を行いました。調査では起床や就寝の時刻、朝食に関することや自分の体調、平日と休日の過ごし方などについて質問しました。

1は自分の体調についての質問です。この結果から「朝起きられない」という児童が19%、「ぐっすり眠れない」児童が12%、そのほか「学校へ行きたくないと思う」児童や体の不調を訴える児童が1割前後いることがわかりました。

1 最近(1~2ヶ月)の自分にあてはまる様子

	朝起きられない	ぐっすり眠れない	朝学校へ行きたくないと思う	食欲がない	体がだるい	イライラする	よく頭が痛くなる	よく腹が痛くなる
低学年	9	2	5	2	3	6	2	1
高学年	6	7	4	5	6	3	4	3
合計(人)	15	9	9	7	9	9	6	4
パーセント (回答数 78名)	19	12	12	9	12	12	8	5

就寝時刻を見ると、午後8~9時の間と答えた児童は78人中38%、9~10時の間は32%でしたが、10~11時に寝ると答えた児童は17%、その中で11時以降は3%いました。アンケートの回答をみると就寝時刻が遅くなる主な原因として、テレビやDVD、ゲームへの長時間接触と相関関係があることが明らかになりました。

2は、子どもたちが家庭でどのようなことをしているかについて、平日と休日を比べたものです。テレビやDVDの視聴は、平均すると平日で一人あたりおよそ1.5時間、休日では2時間程度でした。しかし注意すべき点は、平日と休日で3時間以上見ている児童が、それぞれ10%と15%いることです。このような児童は、テレビだけではなくゲームにも長時間接していることがうかがえます。

2 平日と休日の過ごし方

(左:平日 右:休日)

(回答数 78名)	0分		30分以内		30分~1時間		1~2時間		2~3時間		3時間以上		無回答	
外で遊ぶ	13	5	36	19	27	32	15	22	5	8	3	12	1	3
スポーツ	26	26	24	14	22	17	17	10	6	15	1	14	4	4
読書	32	46	49	24	13	10	3	3	1	0	0	0	3	3
家庭学習	1	1	49	46	42	36	1	10	1	1	0	0	4	5
お手伝い	19	17	63	62	12	14	3	1	0	1	0	1	4	4
テレビ DVD	4	5	18	13	37	19	18	31	10	14	10	15	3	3
ゲーム	44	29	37	33	6	15	4	6	4	4	1	8	4	4
インターネット	78	73	12	13	3	4	3	5	1	1	0	0	4	4
パソコンでメール	96	96	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4
携帯電話でメール	95	88	0	5	0	3	0	0	0	0	0	0	5	4

このほか調査からは、平日でもテレビやゲームに3時間以上接している児童がいることや、少数ではあるものの、インターネットや携帯メールが高学年児童の身近な存在となってきたことが明らかとなりました。

このような実態を受け、今年度本校ではメディアとの関わり方について家庭と学校が連携して対策を講じていくことにしました。日常生活におけるメディアとの接触については、子どもが、あるいは家庭が「主体的にメディアをコントロールし活用する」ことを目指すものとしました。惰性的にテレビをつけていることや制限なくゲームをさせていること、また子どもまかせのインターネットや携帯の使用など、これまで危惧されつつも見過ごされてきたことについて見直し、改善していく取り組みを始めたものです。

2 『早寝早起き朝ごはん』プラス1」運動

文部科学省生涯学習政策局は、子どもたちが健やかに成長していくためには適切な運動、調和のとれた食事、十分な休養・睡眠が大切であるとして、平成18年に「早寝早起き朝ごはん」全国協議会を設立しました。中野市ではこれを一歩進めた『早寝早起き朝ごはん』プラス1」運動を推進してきています。プラス1には、各学校独自の行動目標を設定し、その学校の教育目標の実現や特色ある教育活動として取り組んでいくことを求めています。

本校ではプラス1を「スイッチオフでゆたかな生活」としました。子どもたちとメディアとの関わり方については、健康教育の視点からも考えていくことが重要です。このスローガンには、テレビやゲームとの長時間接触を減らし、早寝早起きを基本とする生活のリズムをつくるとともに、家庭での過ごし方を見直そうとの趣旨が込められています。

本校では家庭でのテレビ視聴やゲームの時間を制限し、それによってうまれた時間を読書や家庭学習、お手伝いや家族団らんの時間に充てようと呼びかけてきました。この取り組みは、清川輝基氏による講演会を契機に、毎月第2木曜日をメディアコントロールデーとしたことからスタートしました。

3 月一度のメディアコントロールデー

平成24年6月10日の日曜参観日に、NPO「子どもとメディア」代表理事の清川輝基先生をお招きして講演会を開催しました。清川先生は現代の子どもの発達不全の要因として、80年代以降急速に子どもたちの生活に普及した電子映像メディア（テレビ、ビデオ、テレビゲーム、パソコン、携帯電話）が大きく関わっていることを指摘され、文科省の「早寝 早起き 朝ごはん」に「テレビを消して外遊び」を加えた運動を展開されていることでも知られています。



今回、清川先生には「君は大丈夫？ —メディア漬けで壊れる子どもたち—」と題してお話をいただきました。お話をお聞きしたのは、4・5・6年生と全家庭の保護者、近隣の学校職員やPTA関係者です。

講演は電子映像メディアとの長時間接触による脳障害の問題や、テレビやゲームの妨げによって適切な時期にコミュニケーション能力が獲得できないなど、少なからず衝撃を伴う内容でした。私たちの生活と切り離せないメディアですが、その接し方や扱い方を間違えると生育期にある児童生徒に多大な影響を与え、ネット社会に潜む危険にさらしかねない状況にあるとの警鐘は、大きな反響を呼びました。

講演会を通して、早急に対処する必要があるとの切実感が保護者と学校とで一致しました。その具体的取り組みが、毎月第2木曜日を「メディアコントロールデー」と決め、家庭でも意識してテレビやゲームから離れる生活を実践していただくよう協力を求めてきたものです。

4 6回のメディアコントロールデーの実施とアンケート結果

6月から始まったメディアコントロールデーは、11月で6回目となりました。この間、取り組みの状況や子どもたちの様子を知るために、毎回アンケート調査を行ってきました。項目は下記のとおりです。

- ①ふりかえり（児童）
- ②取り組んでみてどうだったか（児童）
- ③取り組めた人はテレビやゲームをしないかわりにどんなことができたか（児童）
- ④取り組めなかった人の理由（児童）
- ⑤取り組んだことや心がけたことについて（おうちの方）

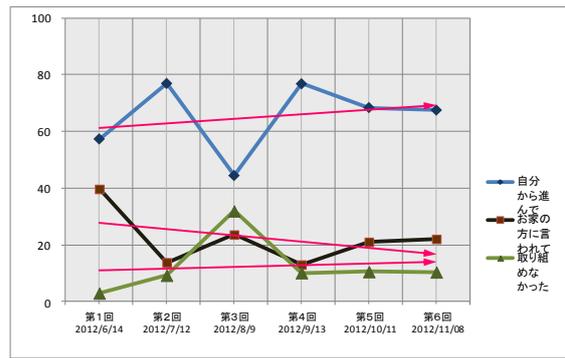
これらの質問項目のほかに、児童と保護者の感想記入欄を設けてあります。

(1) 児童の「ふりかえり」の推移

3は取り組みについての児童の「ふりかえり」で、「自分から進んで取り組めた」のか、「おうちの人に言われて取り組めた」のか、あるいは「取り組めなかった」のか、6回の実施結果を折れ線グラフで示したものです。

「自分から進んで取り組めた」の推移を見ると最大値は2回目と4回目の77%、最低値は夏休み中に行なった3回目の44%でした。最低値の落ち込みは夏休み中であったことに起因するものと推測されますが、それを含めても6回の平均値の増減傾向は、緩やかながらも「自分から進んで取り組めた」児童の増加を示していることがわかります。これは継続して取り組んできたことによって、メディアコントロールの定着が少しずつ広がってきたことを示唆しているものと考えられます。

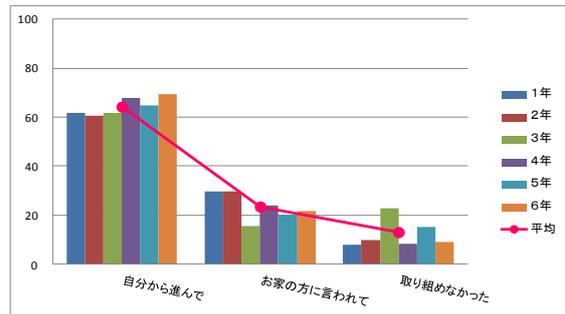
3 児童の「ふりかえり」の推移 (値は各回全校の平均値%)



(2) 学年別の「ふりかえり」

4は1の「ふりかえり」を学年別に5回の平均でグラフ化したものです。「自分から進んで取り組めた」児童は、60~70%とさほど大きな学年差は表れていないことがわかります。ただし、「取り組めなかった」児童については、7%と22%の差 15%の開きが出ました。この数値をどのように減少させていくかが、今後のメディアコントロールの取り組みを推進していく上での一つの課題となりそうです。

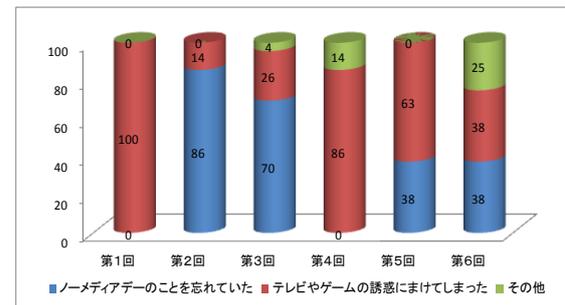
4 学年別の「ふりかえり」 (値は各学年6回の平均値%)



(3) 取り組めなかった理由

「取り組めなかった」児童の理由は、1回目と4回目で「テレビやゲームの誘惑にまけてしまった」との回答が圧倒的に多い結果となりました。一部の児童には、メディア依存の傾向が強く表れていると考えられます。一方、毎月第2木曜日がメディアコントロールであることを忘れていたという児童は、2回目の86%、3回目の70%、5回と6回の38%と減少はしているものの解消されていない様子が見えます。保護者の感想にも忘れていたとの記述が散見されました。1回目と4回目で忘れた児童や家庭がなかったのは、メディア講演会直後であったことや、夏休み明けに児童への呼びかけや指導に力を入れたことによるものと考えられます。一定の成果をあげていくためには、ある程度、学校主体の継続的な啓発活動が必要であることを示唆しています。

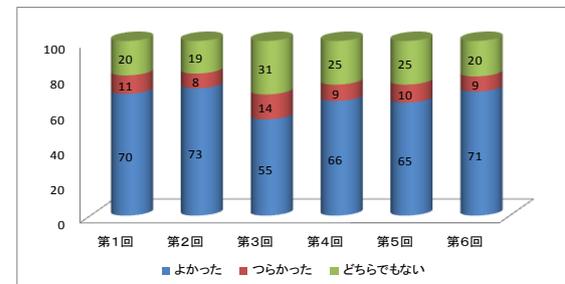
5 取り組めなかった理由 (値は各回全校の平均値%)



(4) 取り組んでみてどうだったか

「よかった」と答えている児童は、3回目の落ち込みを除き、ほぼ横ばい状態です。6回を平均すると67%の児童がよかったと回答しています。「どちらでもない」と答えた児童のなかには「普段からメディアから離れた生活をしているので、さほどつらくもなかった」という感想もみられました。しかし、8~14%の児童は「つらかった」と答えています。「つらかった」という意識を変えていくためには、日頃の生活習慣を見直すとともに、テレビやゲームに代わって充実感や満足感の得られる時間の過ごし方を考えていく必要があります。その一歩として「見たい番組以外はテレビを消す」「ゲームは平日で30分、休みの日は1時間」など、それぞれの事情に即した約束事を決めたという家庭もありました。

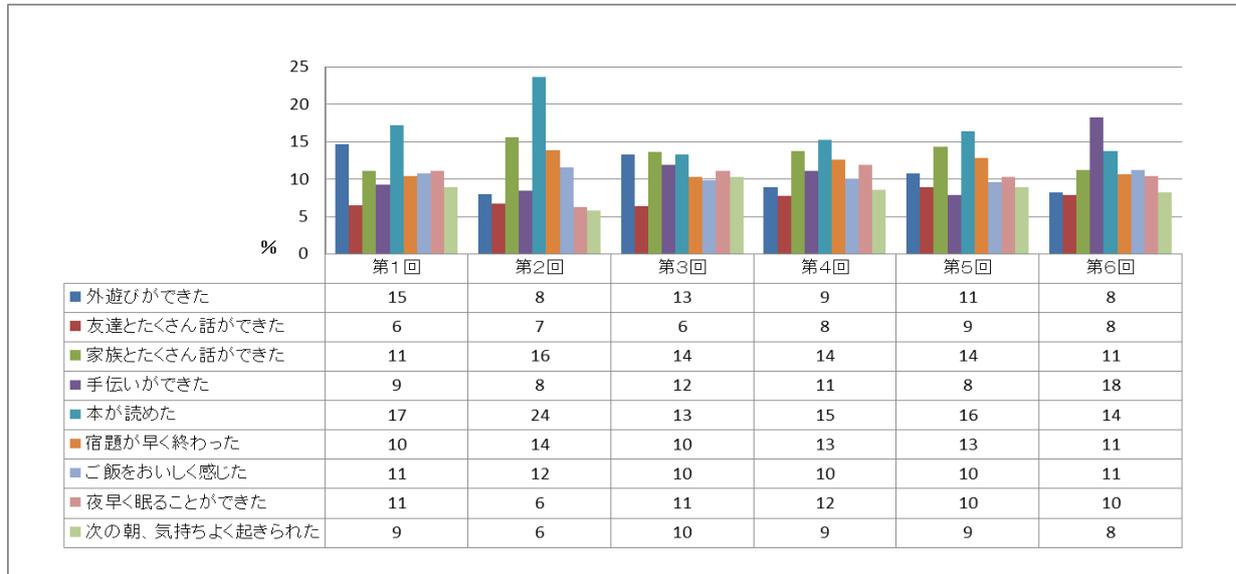
6 取り組んでみてどうだったか (値は各回全校の平均値%)



(5) テレビやゲームからはなれてどんなことができたか

児童がテレビやゲームの時間をコントロールしたことでどんなことができたかの問いに対し、「本が読めた」「家族とたくさん話げできた」「宿題が早く終わった」という回答が上位を占めています。6回目は「手伝いができた」という回答がこれまでで最も多くみられました。感想記入欄には、低学年から高学年まで「本がたくさん読めてよかった」「家族いろいろな話げできてよかった」という記述が多くありました。

7 テレビやゲームからはなれてどんなことができたか (複数回答 各回の値は全校の平均値%)

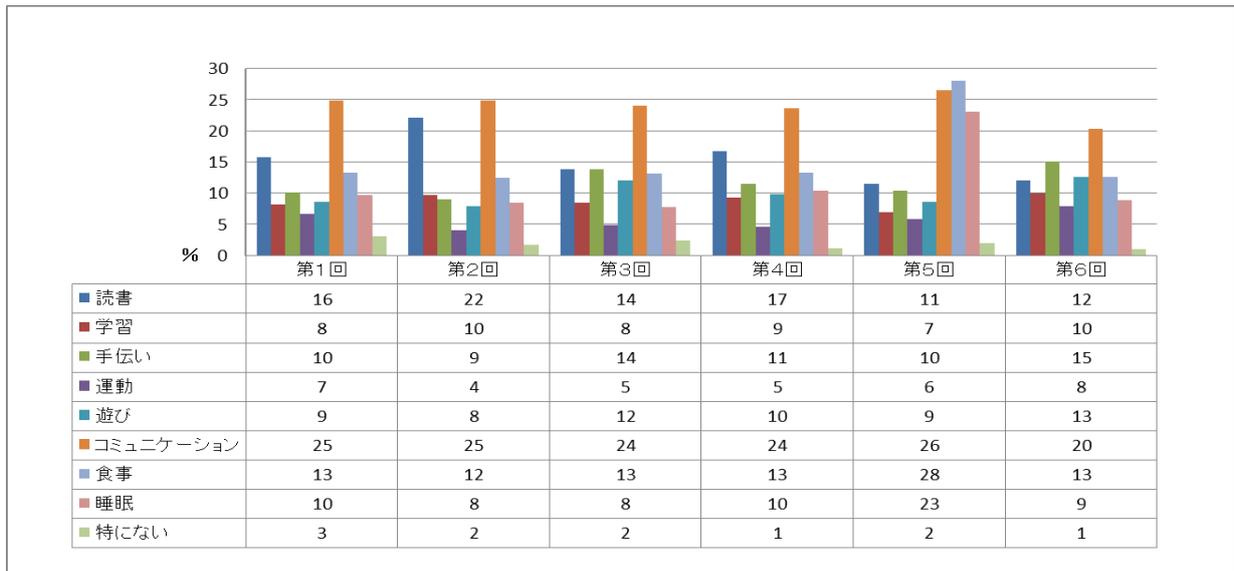


(6) 家庭で取り組んだことや心がけたこと

メディアコントロールデーの日には、家庭でどのような取り組みや心がけをしたのかについて聞いてみたところ、6回を通して優位を占めているのはコミュニケーションでした。「食事のときにテレビを消して子どもとの会話を楽しんだ」「普段あまり話をする機会が少ない父親や祖父母とも話げできた」など、メディアコントロールによって家族のふれあいが深まったとの感想が多く寄せられています。

続くメディアから離れた余暇の活用として家庭での読書が注目されます。弟や妹への読み聞かせや、家族そろっての読書などの習慣化されてきている様子もうかがわれます。

8 家庭で取り組んだことや心がけたこと (複数回答 各回の値は全校の平均値%)



5 メディアコントロールデーを振り返って

半年間に渡るメディアコントロールデーの取り組みの様子を振り返るアンケートを行ない、その成果や課題について検討しました。

(1) 家庭でのメディアコントロールの取り組みについて

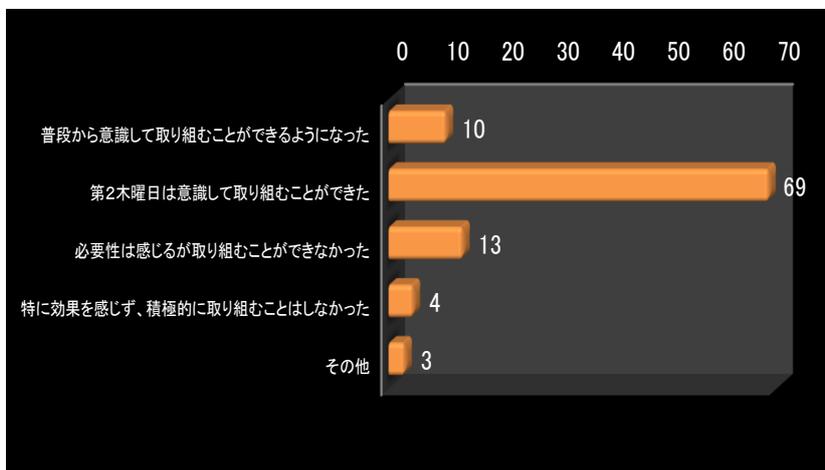
この調査から、69%の家

質問1 家庭でのメディアコントロールの取り組みについて

庭で月1度のメディアコントロールに取り組んでいたことがわかりました。さらに「普段から意識して取り組めるようになった」という家庭は10%ありました。この中には「その他」で「食事の時はテレビを消すようになった」という回答も含めてあります。

メディアコントロールの趣旨に賛同し、実践した家庭が多くありました。しかし、必要と思いながらも取り組みができなかったという家庭も13%ありました。

毎回行なっていたアンケート結果から、次のような課題が明らかとなりました。



【課題】

- ①月1回のメディアコントロールデーを忘れてしまう。
- ②小さい子どもがいるのでテレビの時間制限がむずかしい。
- ③同居している祖父母への遠慮がある。
- ④テレビをまったく見ないというのは無理である。

①は、月1回なのでつい忘れてしまったという家庭は、毎回多くありました。この対処については、学校での指導やおたよりなどを通した呼びかけを継続していくことで改善されるものと考えられます。家庭によっては、カレンダーの第2木曜日に「メディアコントロールデー」と書き込み、忘れないようにしたという取り組み例もありました。

②③は、主としてノーテレビにすることや時間制限がむずかしいと回答しているものです。家庭によってはさまざまな事情があり、テレビを全く見ないというのはよほどのことがないかぎり無理だと思えます。しかし、テレビやDVD依存にならないための子育て環境を整えていくことは大切なことです。メディアコントロールデーが定着した家庭では、兄や姉が小さい妹や弟に本を読む、兄弟で仲良く折り紙やお絵かきをして過ごすなど、メディア接触がなくても過ごせるようになったという報告が寄せられています。低学年の子どもには、親もいっしょになってふれあいの時間をつくってあげることが必要です。楽しい時間を過ごせるように配慮しながら、子どもとの合意のもとにテレビ視聴の時間を制限したり、番組を決めたりすることが大切です。コントロールを継続的に行なっていくことで、メディアとの関わり方のルールを習慣化していくことが可能だと考えられます。

「同居者への遠慮から、なかなかテレビを消すことができない」と訴える保護者もありました。この点については「テレビをつけっぱなしにしない」「食事の時にはテレビを消す」など、できそうなことから家族の理解を求めていくことが大切です。また学校としては、理解と取り組みが広がるようメディアコントロールの実践を積極的に発信していくことも重要であると思えます。

④は子どもだけでなく、親世代の問題でもあります。子育てをしている親自身が、すでにテレビやゲームとの接触が当たり前のなかで育ってきています。メディア接触を制限したり、断ち切ろうとしたりすることに抵抗があるのはむしろ当然なことです。メディアコントロールは

完全にメディアを遮断しようということではなく、必要な情報や楽しみたいものなど取捨選択するところに意義があります。メディアの恩恵を享受しながらも、主導的にメディアとつきあっていく姿勢が大切です。

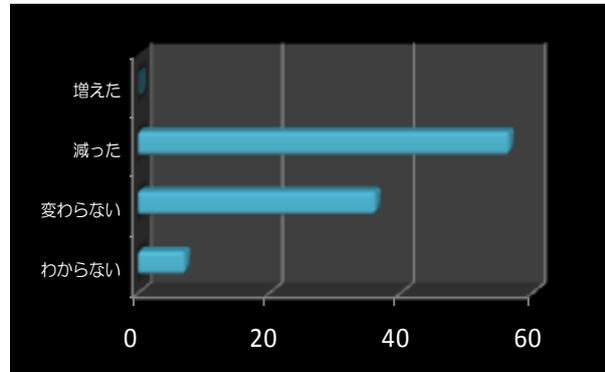
(2) 実施前と比べたテレビやゲーム等に接する時間の変化

半年間、メディアコントロールに取り組んでみて、家庭の様子や意識はどのように変わったのでしょうか。質問2は、テレビやゲーム等に接する時間について、メディアコントロールの実施前と比較したものです。これによると、テレビやゲームの時間が減ったと答えたのは57%で半数以上にのぼることがわかります。学校全体で取り組んできた成果といえます。

一方で変わらないとの回答も36%ありました。こちらは月1回であってもメディアを制限することができにくいことや、日常的に意識して取り組んでいくことのむずかしさをうかがわせる結果となりました。

しかし、家庭によっては「以前からメディアとの接触に制限を設けていたので、メディアコントロールの実施が始まったからといって特別な変化はなかった」という回答もありました。

質問2 実施前と比べたテレビやゲーム等に接する時間の変化

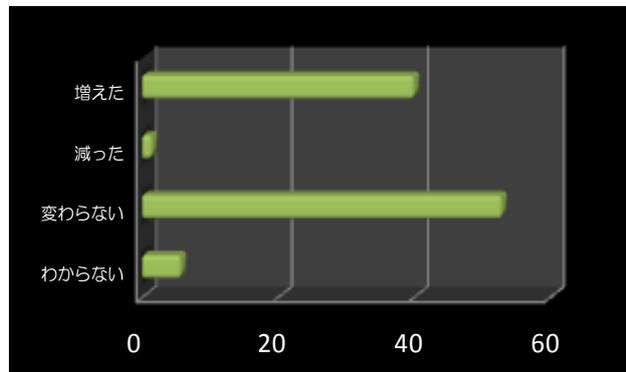


(3) 実施前と比べた親子のふれあい時間の変化

毎月行ってきたメディアコントロールデーのアンケートには、家庭としてどんなことに取り組んだり、心がけたりしたかとの質問があります。回答のなかで一番多かったのは、親子のコミュニケーションでした。そこで改めて親子のふれあいについて聞いてみましたのが質問3です。

これによると「増えた」との回答は39%ありました。一方で「変わらない」との回答が54%ありました。この回答については「少ないまま変わらない」「多いまま変わらない」「メディアコントロールに取り組んでみたが変化がみられない」「メディアコントロール実施の有無に関わらず以前からふれあいに心がけてきたので変わらない」等、さまざまな事情があることが推測されます。

質問3 実施前と比べた親子のふれあい時間の変化

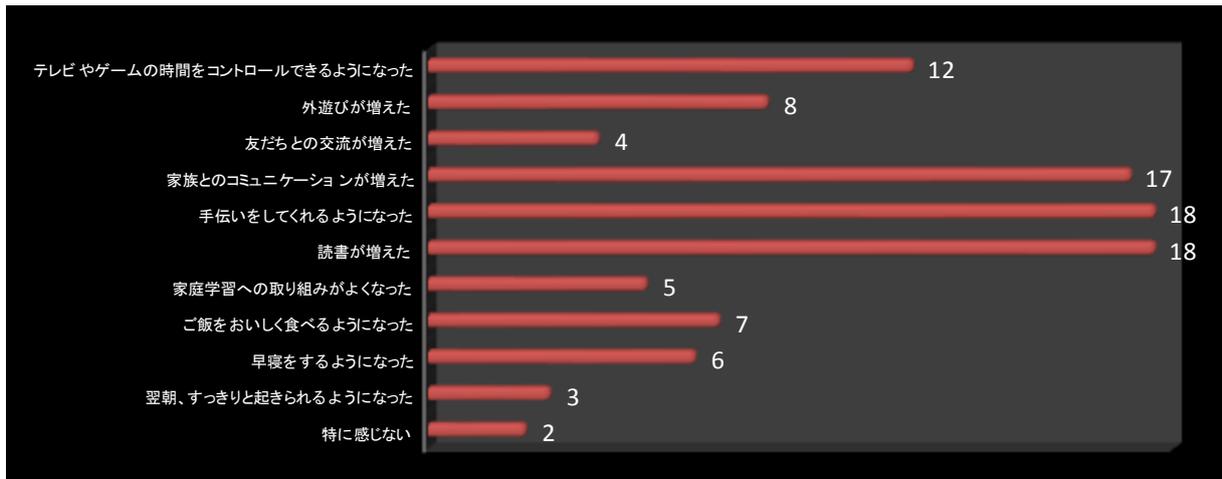


(4) 子どもの変化について感じられること

質問4では、取り組みを振り返って、子どもの姿の変化について質問したものです。手伝いや読書が18%、コミュニケーションが増えたが17%、テレビやゲームの時間がコントロールできるようになったが12%でした。

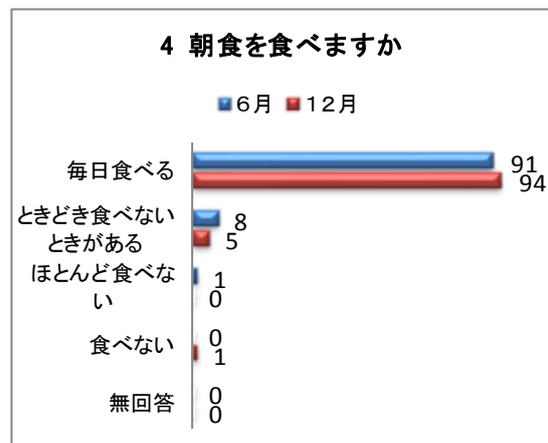
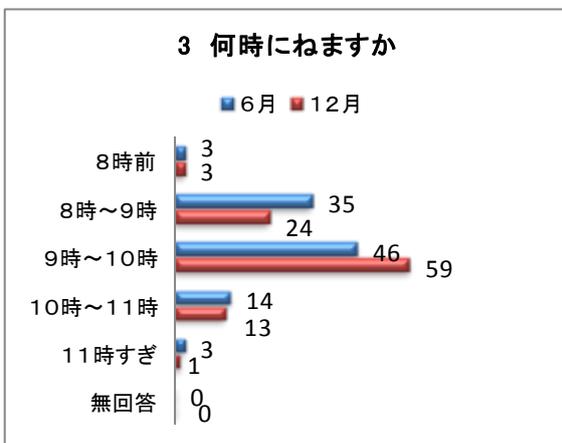
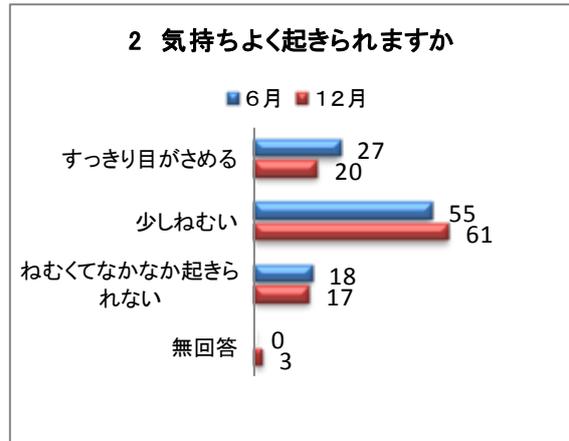
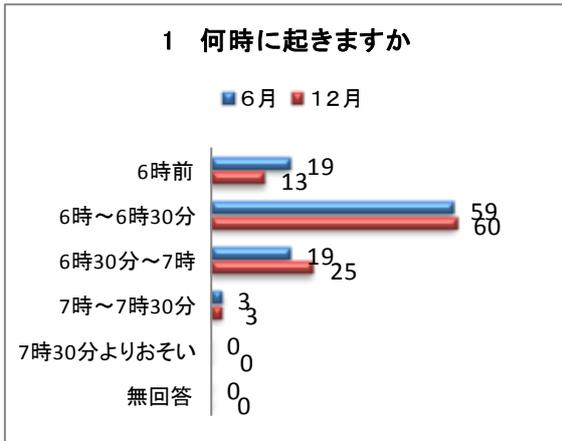
手伝いについては、家族としての役割意識や責任感を養う機会として重要であることが指摘されています。働くことへの意欲づけや自己有用感を培うキャリア教育の視点からも、積極的に勧めていきたいものです。読書はメディアコントロールデーにあわせて奨励してきたこともあり、本を読むようになったという児童が増えました。保護者のなかにも子どもといっしょに読書を楽しむ方が増えてきています。また、家族とのコミュニケーションについては、騒がしい音を消してゆったりとした気持ちで子どもと過ごしたり、食時の時間には家族それぞれの話題を楽しんだりすることができたという感想が寄せられました。テレビの音を消すことによって新鮮な感覚を味わいながら、家族とのコミュニケーションを楽しんだと話された方もいました。

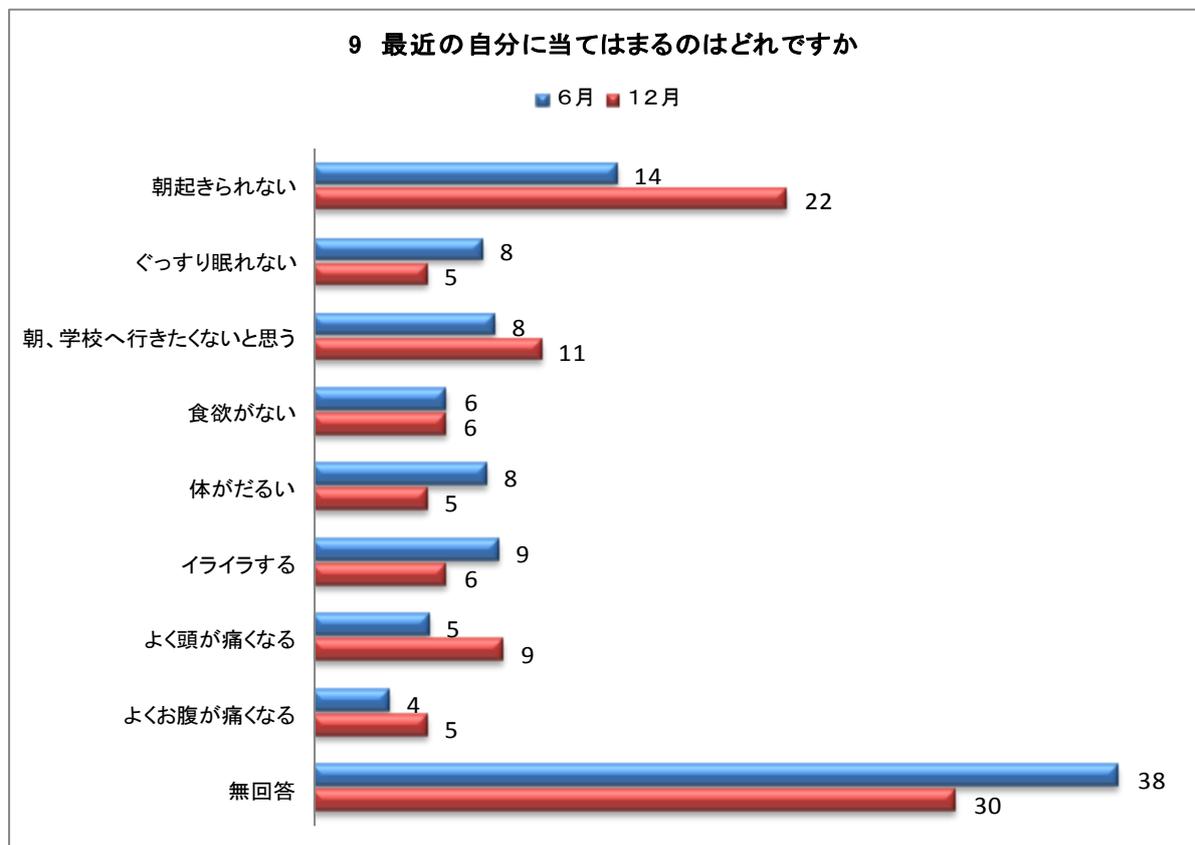
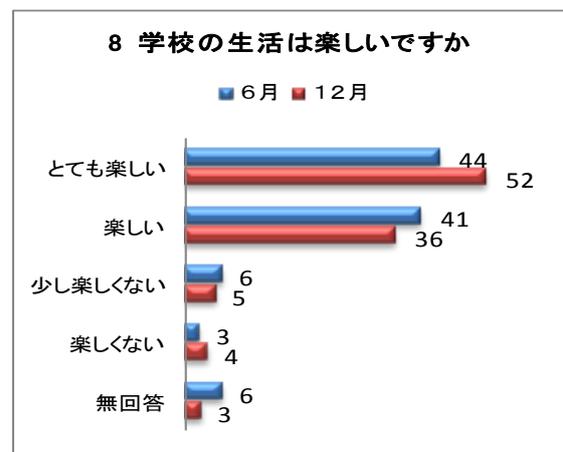
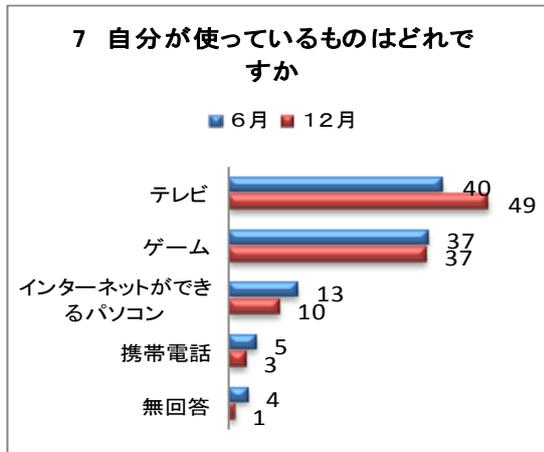
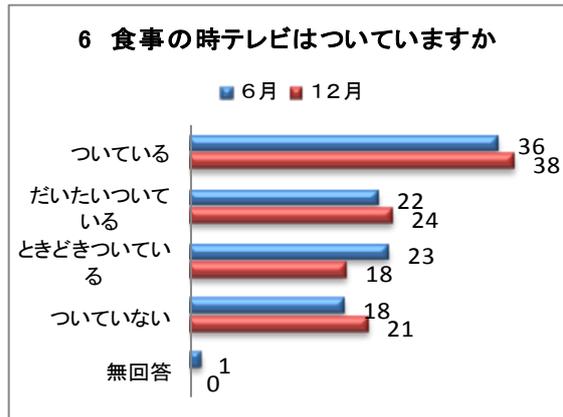
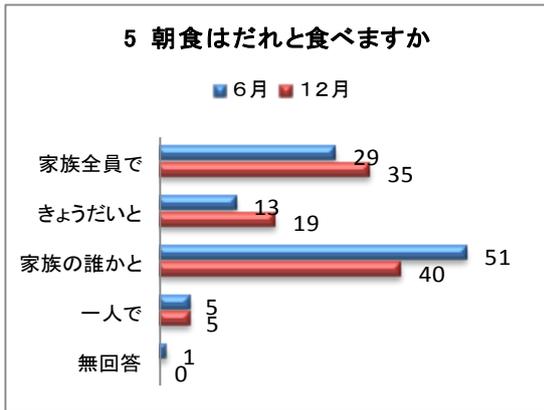
質問4 子どもの変化について感じられること

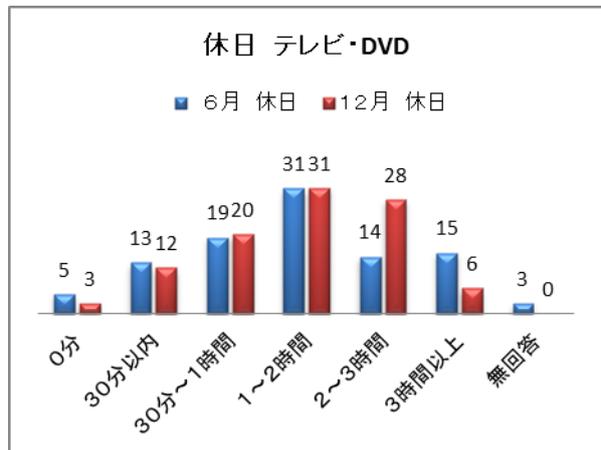
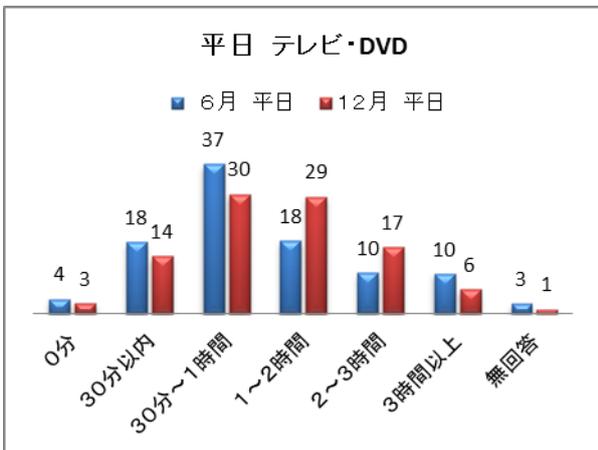
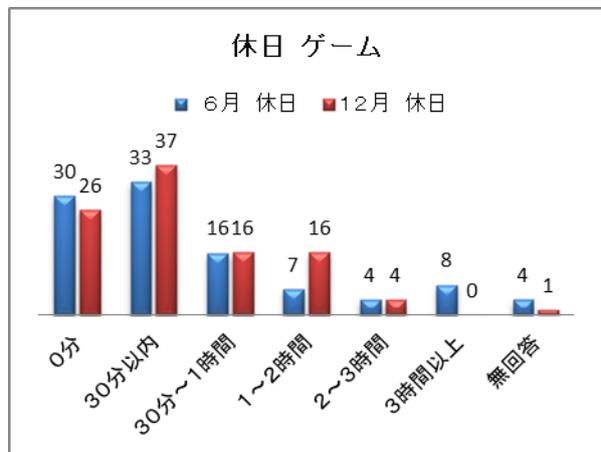
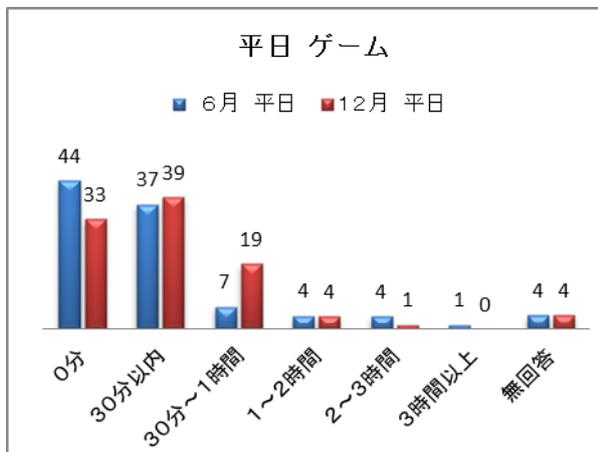
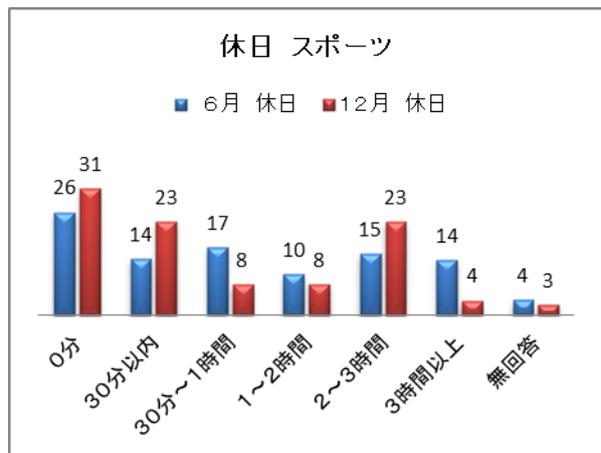
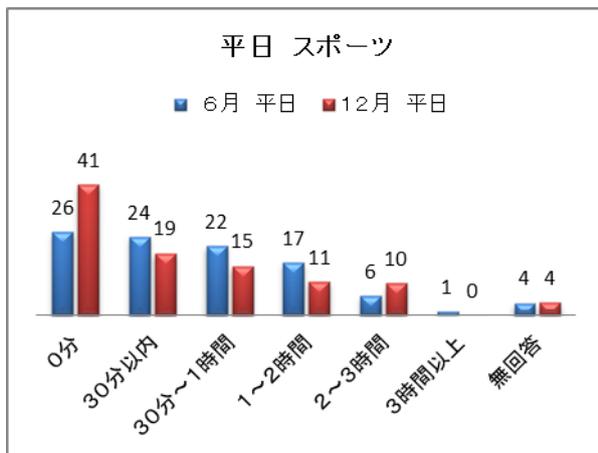
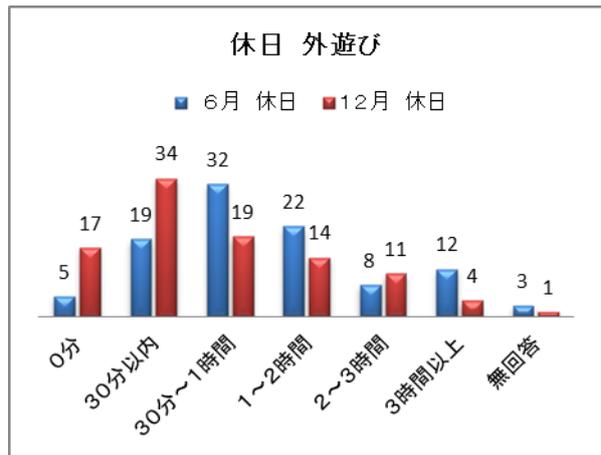
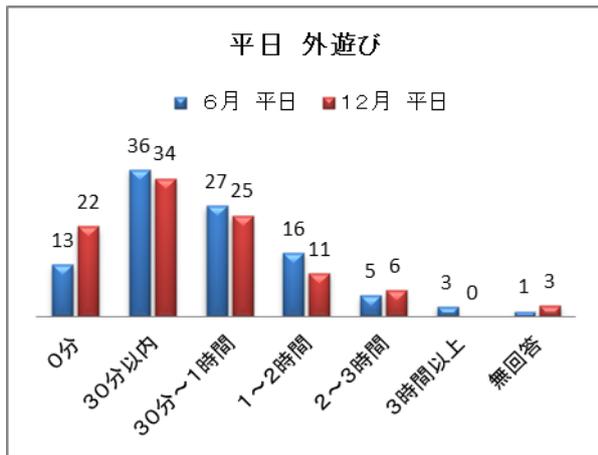


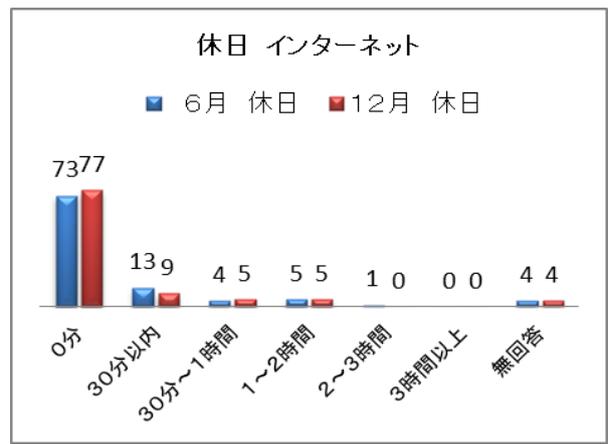
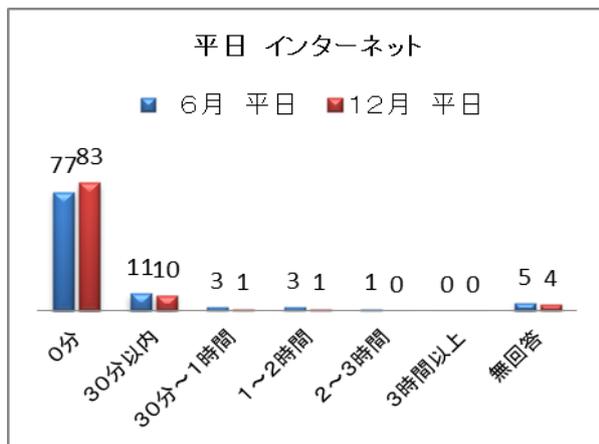
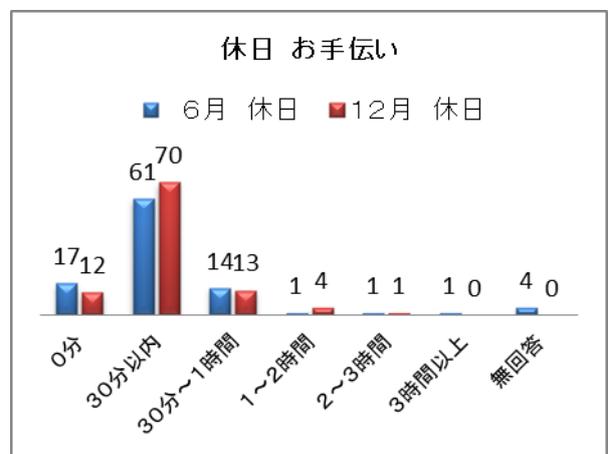
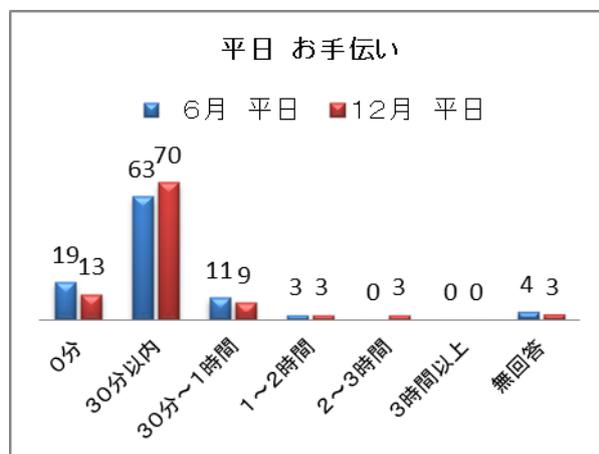
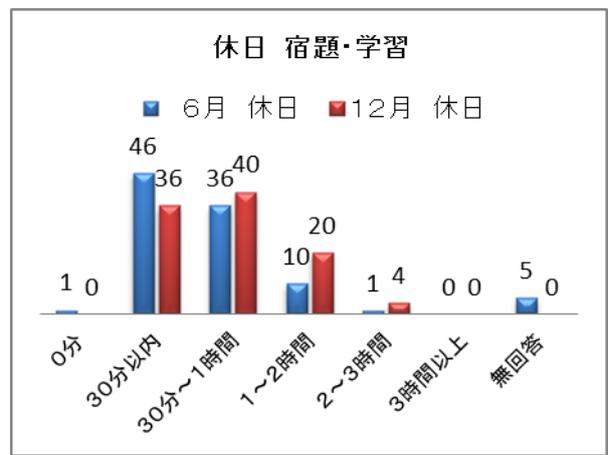
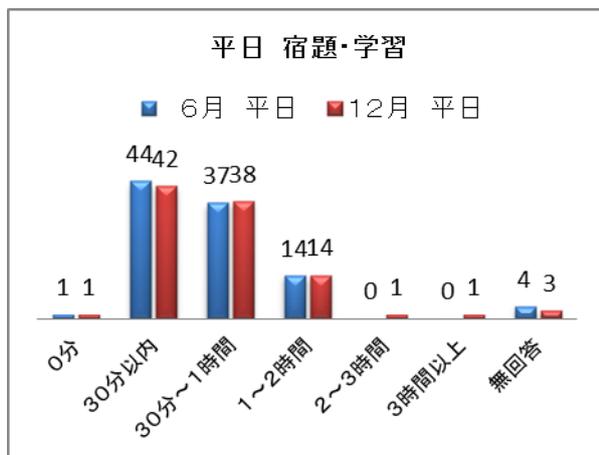
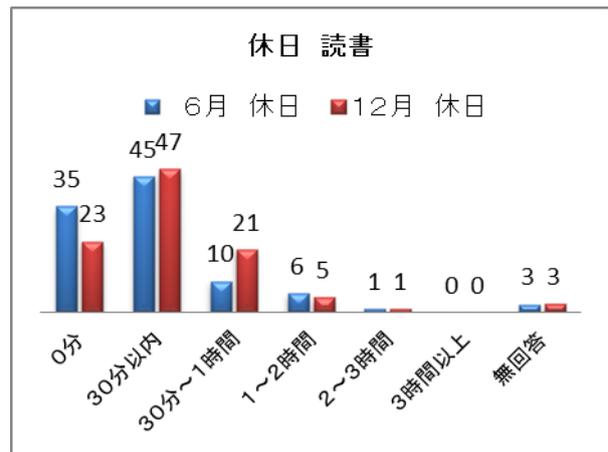
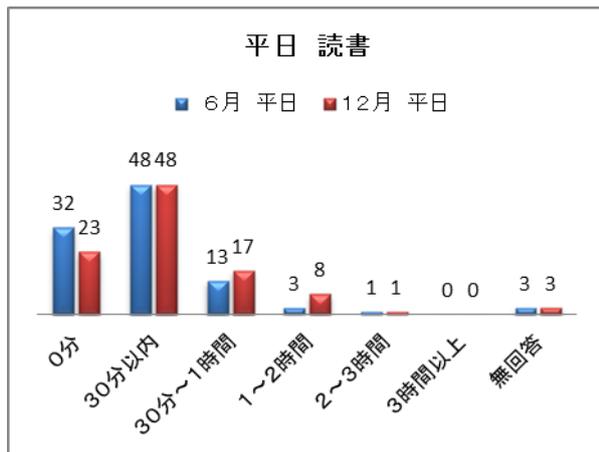
6 生活習慣に関する調査結果の比較から

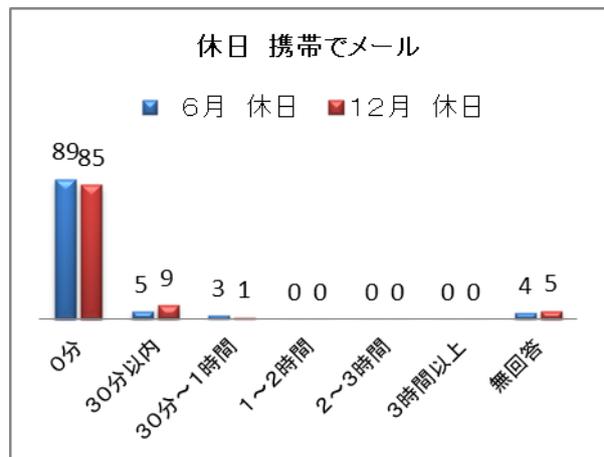
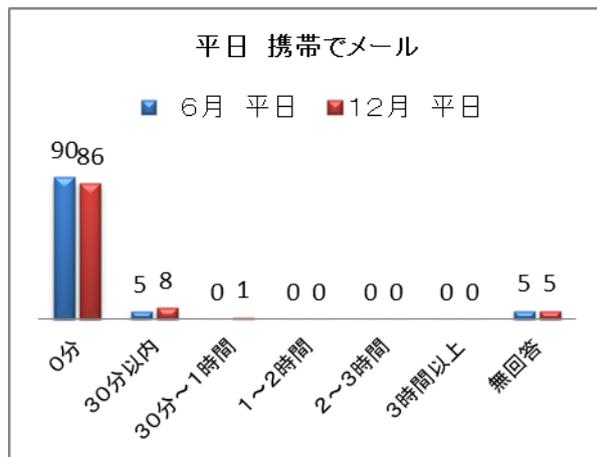
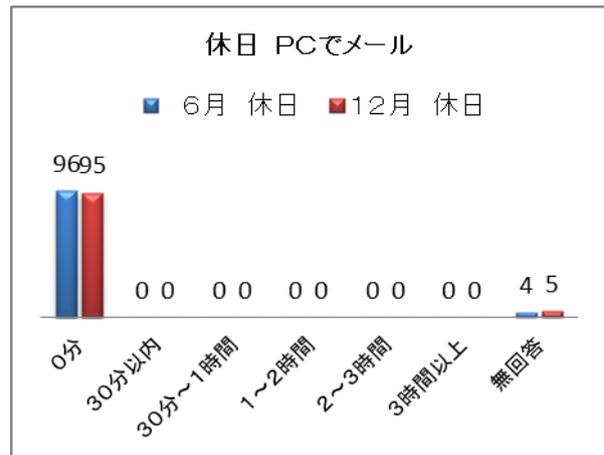
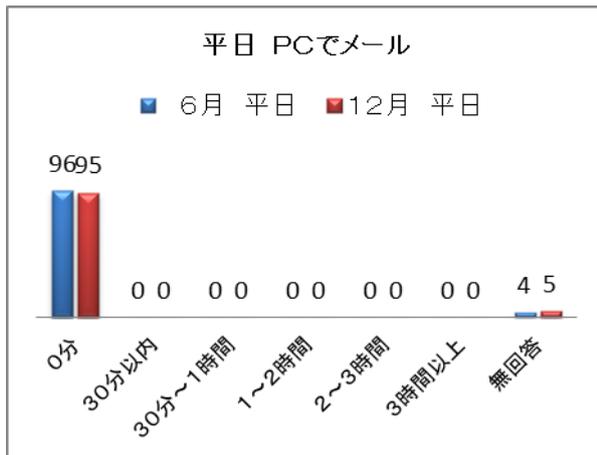
本校では、生活習慣の実態調査を5月に行いました。その後、半年間のメディアコントロールへの取り組みをしてきました。その結果として子どもたちの生活習慣や意識、平日と休日の過ごし方など、健康管理や家庭生活に変化は見られるのか調べるために、12月に再調査を実施しました。以下は6月と12月の調査結果をグラフで示したものです。











これらの結果からは、いずれの項目においても有意差は認められませんでした。家庭での生活時間のあり方をメディアコントロールの視点から見直そうとしている取り組みは、その成果が現れてくるまでには、まだ時間がかかりそうです。しかし、メディアコントロールに関わる点では、ゲームをしたり、テレビやDVDを見たりする時間が、平日休日ともに3時間以上という児童が減少していることがわかりました。長時間のメディア接触を避けようという意識が家庭内にも高まってきたものと期待したいところです。

7 メディアコントロールデー実践の転換期

半年間のメディアコントロールデーを実施してこなかで、テレビやゲームへの接し方、家族の時間の過ごし方などについて、さまざまな反響がありました。「学校としてメディアコントロールに取り組んでいるので、家庭でも子どもたちに注意やしつけがしやすい」「これを機会に家族のコミュニケーションを大切にしたい」などの感想が寄せられました。

- ・メディアコントロールデーの決まった日にちを決めなくても、それぞれの家庭にあった約束ごとでこの取り組みができると思います。
- ・決められると意識してできるので、ノーメディアデーの回数を増やしてほしい。
- ・第2木曜日の他にも少しずつメディアコントロールをしていきたい。
- ・食事のときはテレビを消すようになった。
- ・第2木曜日とは決めなくても、それぞれの家庭でメディアコントロールデーとして1日やることができると良いと思いました。
- ・とても良いことなので、続けていけたらと思います。

このような肯定的な意見や感想に対し、「特に効果を感じず、積極的に取り組むことはしなかった」という家庭もありました。このなかには以前から家族でメディアとの付き合い方を考えてきたので改めて特別なことをせずいたという家庭も含まれています。しかし、大人の方がテレビ

やゲーム、携帯、インターネットと密着した生活を送っているために、メディアへの制限に躊躇する家庭もあったようです。

メディアコントロールデーを継続していく上で配慮しなければならないことは、家庭によってメディアとの関わり方が違うということです。何度も繰り返しますが、テレビを見ないことを推奨しているわけではなく、またゲームを目の敵にしているわけでもありません。それらの利便性や娯楽性を活かし楽しみながらも、主体となるのは個人個人であることを自覚し、適切なメディアとの関わり方や活用力を身につけていくことが大事であると考えています。

1月のメディアコントロールデーには、「わがやのメディアルール」として、それぞれの家庭の事情にあった約束事をつくるようにしました。テレビを見ることに後ろめたい思いをもつような状況は是正していく必要があります。テレビを見る時間を2時間とか、どの番組を見るとか、このようなルールを決めて、まずは取り組んでみるのが大切なことです。各学年ではどのような「わがやのメディアルール」を決めたのか、主なものをまとめてみました。

月一度のメディアコントロールデーの過ごし方	工夫すること	毎日のメディアルール	工夫すること
1 年			
テレビを見ない 本を読む 家族で話をいっぱいする	テレビをつけない	食事時のテレビを消す ゲームをしない	見たい時以外はテレビを消す
テレビは朝の短時間だけにして 帰宅後は読書や遊びをして過ごす	カレンダーにメディアコントロールデーの印をつけ、前日に確認する	決めた番組だけ見る よけいな番組録画をしない 録画番組をダラダラ見ない	ルールを守れたらシールをはる
TV やゲームから離れる 読書や会話を楽しむ	ゲームはししまう	ゲームは7時まで。9時には寝る	できるだけ1時間で切り上げる。
ゲームはやらない 決めたテレビしか見ない	カレンダーにしるしをつける	ごはんのときはテレビを消す ゲームは1時間だけ	タイマーを使う
2 年			
決めた番組以外は見ない テレビを見る時間は1時間 帰ったら先に宿題をやる 30分読書をする	カレンダーにしるしをつける	ゲームは週2日と決める 時間は1時間まで 決めた番組以外は見ない	見る番組だけ新聞に○をする
ゲームをしない テレビの時間を少なくする 読書をする	図書館で本を借りる	テレビは宿題が終わるまで見ない ゲームは多くて30分まで	家族で今日あったできごとを話し合う
テレビ・ゲームをしない 15分本を読む 家のお手伝いをする	メディアコントロールデーの日はシールをはっておく	宿題のときはテレビを見ない 弟と仲よく遊ぶ お米とぎをやる	お母さんからシールをもらう
3 年			
お母さんのお手伝いをして、家族でたくさんお話をする	みんなでごはんを食べる	ゲーム・パソコンは8時以降しない 朝はテレビを見ない	時間を気にする
ゲームはしないで本を読む テレビは決めたものだけ お手伝いをする	学校の本を借りる	休みの日のゲームは30分 宿題をすませてからゲームをやったりテレビを見たりする	タイマーを使う
家に帰ってから寝るまで、テレビやゲームをしない 読書や家族で遊ぶ	カレンダーにしるしをつける	ゲームは時間を決めてやる 宿題のときはテレビを消す お休みの日は外で体を動かす	家族で協力してやることを決める
家に帰ったらすぐ宿題をする	カレンダーにメディアの日を書く	宿題がすむまでゲームはなし お母さんが帰ってくるまでに終わらせる	読書の時間を作る
4 年			
TV やゲームからはなれ読書や会話を楽しむようにする	ゲームはししまう	ゲームはPM7:00まで 9:00には寝る。	ゲームは1時間
ゲームは夕飯の前まで	メディアの日はカレンダーに○をつける	宿題が終わるまでテレビは見ない	テレビがついていたら自分から消す。皆にも声をかける
月一度くらいはテレビ、ゲームを完全にやらない	いっぱい話をする	時間を決めてテレビやゲームをやる	いっぱい話をする
テレビをつけない、ゲームをしない、読書をする	1日中テレビをがまんする 速く行動する	寝る前の30分間はみんなです つしょに読書が読み聞かせ	一日中、テレビをがまんし、速く行動する

5 年			
帰って来てからすぐテレビを見ずに勉強をする	家に帰ったらテレビを消す	テレビをあんまり見ない 読書をする	日にちで何をするかを定める
ゲームをしない	テレビをあまり見ない	ゲーム1日2時間(休みは2時間30分)	ゲームはあまりやらない
テレビを見る時間はいつもより短くする 決めた番組しか見ない	日にちをかいてはっておく	宿題が終わるまでは、テレビを見たり、ゲームをしたりしない	何時に宿題をするか、いつも決めて宿題をする
見たい番組だけ見て、他の番組は見ない 読書をする	なるべくテレビを見ないようにする	宿題のときはテレビを見ない	なるべくテレビの時間を少なくする
6 年			
ニュースと天気予報は良し 早く寝る	ゲーム機を片付ける	ゲームは1時間にする	
テレビの見る時間を減らす	家族全員で参加	携帯を使すぎない	周りの人に協力してもらう
家に帰ったらすぐに宿題をすませる 読書をいっぱいする	学校で本を借りたり、家にある本を読んだりする	帰宅後すぐに宿題をすませる ゲームやインターネットはあまりやらない	ゲームやインターネットの使用時間を決める
決めた番組だけを見る 読書を5分以上はする	学校で本を借りる	ご飯のときは携帯を見ない ゲームはやることが終わり許可をもらって6時まで(30分)	注意し合う

8 今後のメディアコントロールへの取り組み

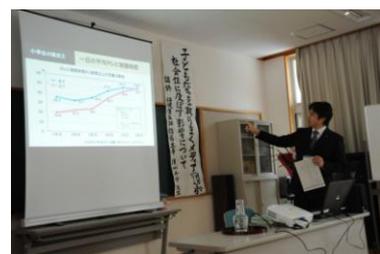
これまでメディアコントロールの中心は、テレビとゲームでした。しかし、生活習慣に関する調査から、高学年児童のなかにはインターネットや携帯のメールなどを日常的に使っている子どもいることがわかりました。これらは直接外の世界とつながっているだけに、大変危険な状態に置かれているともいえます。ネット社会に広がる危険について、教師自身も十分な知識と予防策を持ち、家庭と連携を取り合いながら、子どもたちへの指導にいっそう力を入れていくことが急務といえます。

1月18日には学校保健員会の企画による講演会を開催しました。長野県保健厚生課指導主事の須山千才先生を講師としてお迎えし、「子どもたちを取り巻くメディア(停滞・ゲーム等)が社会性に及ぼす影響について」と題して、携帯電話所持率やメール交換と各種リスクとの関係などについてお話をいただきました。

— 講演会 保護者の方の感想から —

講演会は本当に良いお話を聞くことができ良かったです。親子の会話の大切さを改めて強く感じました。今年から始まったメディアコントロールデーも、初めはすごく大変だと思い、なかなかできませんでしたが、毎月子どもたちと取り組んだり、考えたりすることで、いつの間にか日常生活にも定着してきていて、本当に良い機会を与えていただいたと感謝しています。我が家は、幸い子どもたちが皆小学生で同じ取り組みができているのも良いのかなと思いました。

これから先、子どもたちが高校生くらいになったとき、やっぱり携帯などもつ時期が来ると思います。そのときに親子の会話ができなくて困らないよう、今のうちから会話を大切にしていこうと思いました。今問題になっているネット依存で病院へ通う…なんてことのないようにしていかなければと思います。



情報化社会は時代の趨勢ではありますが、情報の正しい選択、評価などメディアリテラシーを身につけさせていくことの重要性は改めていうまでもありません。携帯やインターネットに対する危険を回避していくためのネットリテラシーが求められているように、早い時期から子どもたちに理解させていくことが重要といえます。

小学生の家庭では危機感が少ないかもしれませんが、ネット上のオンラインゲームはネトゲ依存症という社会現象まで引き起こし、ひきこもりやニートの潜在的要因とも指摘されています。「知らないのはおとなばかり」とならないよう、今後のメディアコントロールについて、保小中、地域とも連携して考えていきたいものです。

(H25.2.13 教頭 宮下 宏)